

東海道草津宿関係史料 (庄屋駒井与左衛門家文書) (三)

小林 博

〔駒井家文書一五ノ一二〕

往還
大除地水溜
駒井氏

(注) 表紙のみで、意味不明)

柱四本

四寸五分角

一 御高札場

長式間
幅四尺

柵表裏二面
四拾式本
両縁
八本

三寸八分角

同

台敷

八寸角

東上 定

右之処当時長幅共相違享和度明細帳を見合事

一 親子兄弟夫婦を始め諸親類に志たしく下人々に至る迄これをあわれむへし主人ある輩者をの

一 其奉公に精を出すへき事
家業を専にし悔る事なく万事其分限に過へからざる事

一 いさかいをなし又ハ無理をいひ惣して人の害になるへき事をすへからざる事

一 博亦の類一切に禁制の事

一 喧嘩口論をつつしみ其事あるときみたりに出合すへからす手負たるものかくし置へからざる事

一 盜賊悪党の類あらば申出へし急度御ほろひ下さるへき事

一 死罪に行はるるものある時馳集るへからざる事
一 人売買かたく停止す但男女の下人或ハ永年季或ハ譜代に取置事 相對に任すへき事

一 附り譜代の下人又ハ其所に往來る輩他所え罷越妻子をも持 二付候者呼返すへからす但し

一 罪科あるものは制外之事

右條々可相守之若於若相背者可被行罪科者也

正徳元年五月日

奉行

西上 定

一 駄賃并人足荷物次第

御伝馬并駄賃の荷物卷駄

重サ 四拾貫目

歩もちの荷物卷人

重サ 五貫目

長持卷丁

三拾貫目

但し人足卷人持重サ五貫目の積り三拾貫目の荷物ハ六人にて持へしそれより軽き荷物ハ貫目にしたかひて人数減すへし此外いつれの荷物もこれに准すへし

乗物卷丁

次人足六人

小乗物卷丁

次人足四人

一 御朱印伝馬人足の数御書付の外に多く出すへからざる事

一 道中次人足次馬の数たとへ国持大名たりというとも其家中ともに東海道は一日に五拾人五拾疋に過へからす其外の伝馬道は式十五人式拾五疋に限へし但江戸京大坂の外道中において人馬ともに追通すへからざる事

一 御伝馬駄賃の荷物ハ其町の馬残らす出すへし若

駄賃馬出目く入時ハ在る所々よりやとひたとひ風雨の節といふとも荷物遅ニなきように相見ハからふへき事

一 人馬之賃御定之外増銭を取においては牢舎せしめ其町の間屋年寄ハ過料として鳥目五貫文宛人馬役ハ家老軒より百文宛出すへき事

附

往還の輩理不尽の儀をかけ又ハ往還の者に對し非分の事あるへからざる事

右条々可相守之若於相背可為曲事者也

正徳元年五月日

奉行

東上ヨリ二段目 定

一 草津よりの駄賃并人足賃銭

石部迄

荷物卷駄

百四拾文

乗掛荷人共

同 断

から尻馬卷疋

八拾八文

附

あふつけハから尻ニ同しそれより重き荷物ハ本駄賃銭に同しかるへし夜通し急に通る

輩へから尻に乘共本駄賃錢と同前たるへし

人足沓人 六拾九文

守山迄

荷物沓駄 六拾九文

乗掛荷人共ニ 同 断

から尻馬沓疋 四拾五文

人足沓人 三拾五文

矢橋迄

荷物沓駄 四拾九文

乗掛荷人共ニ 同 断

から尻馬沓疋 三拾五文

人足沓人 貳拾五文

大津迄

荷物沓駄 百六拾六文

乗懸荷人共 同 断

から尻沓疋 百九文

人足沓人 八拾沓文

泊 木賃錢

主人沓人 三拾五文

召仕沓人 拾 七文

馬 沓疋 三拾五文

右之通可取之若相背於者可為曲事者也

正徳元年五月日

奉行

東ヨリ二枚目

上ヨリ二枚 定

きり志たん宗門へ累年御制禁たり自然不審成者有ら
ハ申出へし御ほうひとして

はてれんの訴人 銀五百枚

いるまんの訴人 銀三百枚

立かへり者の訴人 同 断

同宿并宗門訴人 銀 百枚

右之通下さるへしたとへは同宿宗門の内たりといふ
とも申出る品により銀五百枚下さるへしかくし置他
所よりあらはるゝにおいてハ其所之名主并五人組迄
一類ともに罪科におこなはるへき者也

正徳元年五月日

奉行

東ヨリ二枚目
上ヨリ二枚目

定

一 火を付たる者を志らハ早々申出へし若かくし置
においてハ其罪重かるへしたとい同類たりとい

う共申出るにおいてハ其罪をゆるされ急度御褒美下さるへき事

火を付たる者を見ればこれを捕へ早々申出へし見のかしこにすべからざる事

あやしき者あらハせんさくをとけて早々御代官地頭へ召つれ来るへき事

火事之節鎧長刀脇差ハぬき身にすへからざる事火事場其外いつれの所にてても金銀諸色ひろいと

らハ御代官地頭へ持参すへし若し隠置他所よりあらハるゝにおいてハ其罪重かるへしたとへ同

類たりといふ共申出る輩は其罪をゆるされ御褒美下さるへき事

一 右條々可相守之若於相背可被行罪科者也

正徳元年五月日

奉行

定

何事によらずよろしからざる事小百姓大勢申合せ候をととうとなへとどうして志ひてねかひ事くハたつるをこうそといひあるひハ申あハせ村方たちのき候をてうさんと申前々より御法度ニ候条右類の儀これあらハ居村他村にかきらす早々そのすし

の役所へ申出つへし御ほうひとして

ととうの訴人 銀 百枚

こうその訴人 同 断

てうさんの訴人 同 断

右之通下されその品ニより帯刀苗字も御免あるへき間たとへ一旦同類に成候とも発言いたしもの、名まへ申出るにおいてハその科をゆるされ御ほうひ下さるへし

一 右類訴人いたすものもなく村々騒立候節村内のもの差押へとどうにくわゝらせす一人もたしいたさざる村方これあらハ村役人にてても百姓にてても重々にとりしつめ候ものハ御ほうひ銀下され帯刀苗字御免さしつきしつめ候ものとも、これあらハそれハ御ほうひ下しおかるへき者也

明和七年四月日

奉行

東ヨリ三段目

定

一 毒薬并似せ薬売買の事禁制す若違犯の者あらは其罪重かるへしたとへ同類といふとも申出るにおいてハ其罪をゆるされ急度御褒美下さるへき事

一 似せ金銀売買一切に停止す若似せ金銀あらは金座銀座へつかハし相改むへしはつしの金銀も是又銀座銀座へつかハし相改むへき事

附 惣して似せ物すへからざる事

一 寛永之新銭金子壹匁兩に四貫文壹歩にハ壹貫文たるへし御料私領共に年貢収納ハにも御定のことくたるへき事

一 新銭之事錢座の外一切鑄出すへからざる事

一 新作之槌ならざる書物商売すへからざる事

一 諸職人いひ合セ作料手間賃ハ高値にすへからす

諸商売物或ハ一所に買置しめたりし或ハいひ合せて高値にすへからざる事

一 何事によらず誓約をなし徒党を結ぶへからざる事

右條々可相守之若於相背可被行罪科者也

正徳元年五月日

奉行

東ヨリ二枚目
上ヨリ三段目

唐物積拔之義ニ付先年々度々相觸処近来不正之商売いたすもの之有趣粗相聞不届候以来海陸浦方村町間道筋且船中ニ而茂怪敷荷物と見懸候ハ、相糺

不正之荷物ニ之有者早速荷物人とも其所江留置荷物ハ所役人荷主立会封印之上預リ置長崎奉行所又者其所之奉行或ハ御代官領主地頭へ申し出る可候若荷主幸領ハ取逃候ハ、其所之役人共立会荷物封印せしめ訴出へき事

一 たとひ同類たりとも訴出においては其罪をゆるし荷物ニ随ひ多分ニ褒美銀下ざるへき事

一 抜荷差押候者并村役人 勿論都而不正物附送り候を差押訴出においては其支配筋役人場所ニ而始末相尋奉行所江其段可届出候於然者右之者共奉行所江不及差出聞懸り合之処を不厭心懸差押訴出へく候む其荷物ニ随ひ多分ニ褒美銀下ざるへき事

一 薩州よりは白糸紗綾ニ限り京都ニ間屋定置相廻し対州よりハ遂砂其外菜種類唐物ハ紛敷品者箱詰之上朝鮮之旨相記し売先送状ハ紛敷無之様宗対馬守役人送状を以相廻儀ニ候右之外都而唐紅毛持渡之品者長崎表ニ而買請五ヶ所糸割符宿老手板証文添相廻儀ニ候手板無之荷物之分ハ不正物ニ有之候間其旨心得へき事

一 右之外先年より抜荷物之儀ニ付度々仰出され処之觸書之趣違失無く急度相守る可き者也

文化二丑年二月

似せ金銀錢拵候もの并売捌候もの雖為御制禁近
来奥羽筋者専ら行ひ候もの有之候付今度吟味之
上夫々殿科に処せられ候就而者右兩國者勿論國
々殿敷可被遂御穿鑿候条済々油断無く相致自然
疑敷もの有之ハ早々其筋江申出る可し品々によ
り御褒美下され其ものハ仇をなる、様に仰付ら
る可く候若見聞ニおよひながら隠置他所より願
はるゝにおいてハ其所之もの迄も罪科行わるべ
く候

寅六月

天保十三寅年記

定

当丑三月ハ来午二月迄中五ヶ年之間駄賃并人足賃錢

都合五割増之

石部江

荷物屯駄

貳百拾貳文

乗掛荷人共

同断

軽尻馬老疋

百廿六文

人足老疋人

百八文

守山江

荷物屯駄

百八文

乗掛荷人共

同断

軽尻馬老疋

六十八文

人足老疋人

五十三文

矢橋江

荷物屯駄

七拾四文

乗掛荷人共

同断

軽尻馬老疋

五拾壹文

人足老疋人

三十八文

大津江

荷物屯駄

貳百五十一文

乗掛荷人共

同断

軽尻馬老疋

百六十貳文

人足老疋人

百廿六文

右之通可取之若於相背者可為曲事者也

嘉永六年丑三月

奉行

右五割増御高札午三月ヨリ年延ニ付午三月ハ亥
二月迄中五ヶ年之間と御認替相成年号者安政五
年午三月と有之

(注、二〇一は次号にまわす)

一二 乍恐奉願口上事

宿内往還通宮川石橋兩側御建被為置候法示杭朽損し文字ホ一向難分相成候間夕乍恐御見分之上御建替被為成下候様御願奉申上候則左ニ杭木之寸方奉申上候以上

高サ八尺巾四寸角

△此橋之上車引へからす

右之通ニ御座候

文政七

申五月七日

嘉兵衛

四郎兵衛

山内半助

御奉行様

一三 乍恐奉願口上之事

宿内入口三方ニ御座候法示杭朽損し候ニ付建替仕度御願申上候□杭木之絵図奉御高覽入候間乍恐御見分之上右願之通御聞濟被為成下候者難有仕合ニ奉存候以上

△宿内牛馬御附之者乗へからす

右之通ニ御座候

文政七年

草津宿

年寄

申五月七日

嘉兵衛

四郎兵衛

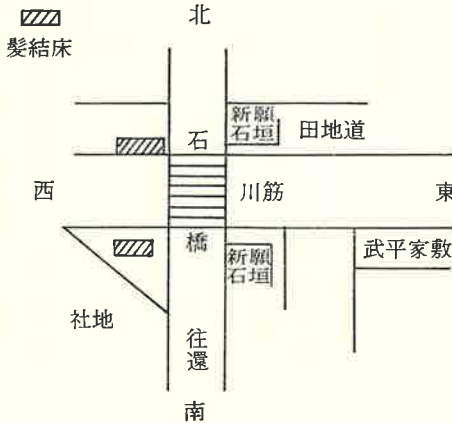
山内半介

御奉行様

一四

去月廿七日より五月朔日迄雨附続宿内字宮川満水ニ而御普請所往還通石橋下石垣川上江引続ニ御座候武兵衛家居壁下之石垣危ニ相見へ候ニ付若石垣相崩候而者橋為持石垣無覚束候ニ付御詰合大江新右衛門様へ御届申上候処早速御出役被下候中無間も武兵衛持石垣拾間斗一時ニ崩落候而既ニ石橋下之石垣茂崩落可申之処人足数多呼寄大江新右衛門様夫々御下知被下疊葎竹木等押込ミ種々相坊候中川下ニ而切所出来水引も早ク漸々相凌候得共石数拾ケ斗崩申候乍併橋下者無難ニ御座候右奉申上候通比度之儀者雨茂降止ミ切所等も出来ニ而水引も早ク并大江様敵敷御下知ニ而石橋も無難ニ候石板崩候時分と水重ニ而□□□□大崩ニ相成可申哉ニ被存候右様之仕合御座候得者其後出水之節石

橋相抱り候義出来可申哉ニ奉恐入候間此度石橋河
 之石垣川上之方ニ而土堤中ニ八尺ツ、積候可付
 候ハ、浚土堤崩候共石橋ニ相抱り申間敷奉存候間
 則左ニ粗絵図積り書奉御高覽入候間乍恐御見分之
 上右之通御普請被為成下候様御願奉申上候以上



積り書

一 水 石堀高サ七尺五寸奥行八尺但し北面式ヶ所
 此坪三坪三分三リ石之大キサ差物三人物ニ而小
 間つみニいたし此石数百疋ツニ付疋又三步かえ

代 百卅又

一 積手間拾四人

一人ニ付

代六十又式分

四又三分

一 濱上ヶ

代百弍十五又

老厘弍分五

一 綱木老間半末口老尺弍本

同 老間半弍本末口四五寸

代廿八又弍分

一 手伝人足 八拾人

代弍百四十又

土のけ

中こむ

水かへ

入用

ノ 五百八拾三又四分

右之通御座候以上

五月十四日

文政八酉年

高田儀介

嘉兵衛

田中七左衛門

山内 半介

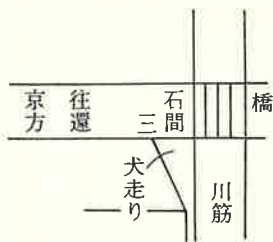
御奉行様

一五

乍恐奉願口上事

一 私居敷之儀破損仕有之候上当五月一日洪水ニ而川

端積石并土居相崩候ニ付弥家建大破ニおよひ候而其難渋仕候夫故下地建家を解古木をもつて組建直し是迄葺^む屋根之所瓦屋根ニ取替軒間四七間半之処此度四間半ニ建梗北石橋之詰より家迄道表ニ而三間裏ニ而老間通り犬走り明ケ申度候則左ニ荒絵図奉御高覧ニ入候何卒御見分之上右願之通御免被為成下候ハ、難有仕合ニ可奉存候以上



右之通ニ御座候

五月十六日

文政八酉年

願主

武平

組頭

文兵衛

〃

庄兵衛

年寄

嘉兵衛

御奉行様

田中七左エ門

一六 乍恐奉願口上書之事

一 私表ニ是迄御座候門殊之外破損およひ見苦敷御座候ニ付此度張替仕度夫ニ付在来之門者板屋根作ニ而度々修覆^し相廻り難渋仕候ニ付此度瓦屋根之作建替仕度候付此段願奉申上候乍恐左之通荒絵図奉入御高覧候間右願之通御聞濟被為成下候ハ、広大之御慈悲と難有仕合ニ奉存候以上

五月十五日

天保七申年



組頭

乃 ぶ 印

〃

弥 七 印

与治兵衛印

御奉行様

庄屋

山内半助印

(兩御役所差上候
当中村様へも差上候
五月十九日御聞濟之事)

一七 乍恐奉届口上之事

一 当宿東海道口往還端ニ有之候字尾丸大松昨十七日
昼六ツ時比南之方に打倒候付乍恐此段御届奉申上
候以上

草津宿

年寄 八田助右衛門

四月十八日
天保十二年丑年

庄屋 竹村甚七

庄屋 深尾権左衛門

御奉行様

兩御役所江

別紙ニ

右者往還之差障ニは相成不申候得共至而大
樹ニ而太サ廻リ三間半斗有之甚稀成松ニ御
座候往古右松の中に老人之夫婦住居致折
々糸延之音相聞候杯と申伝へ名木ニ御座候

一八 乍恐奉願口上之事

一 当駅東宿端ニ有之候字尾丸大松木之義此度朽倒候

故右者珍敷古木ニ而是込宿方ニおいても神木之様
ニ相心得右松之中ニ老人之夫婦住居いたし居様ニ
往古々申伝候程之義と至而大切ニ取扱仕罷居候処
此度風雨ホも無之節不斗打倒候義誠ニ一同氣掛リ
ニ御座候此候空敷相成候而者氣済不仕候故右之松
木雨覆仕永く残置申度旨一同申居候間乍恐宿衆江
被下置候様奉願上候何卒御憐愍を以右願之通御聞
濟被為成下候ハ、難有仕合ニ奉存候以上

六月

草津宿年寄

八田助左衛門

竹村甚七

深尾権左衛門

御奉行様

一九

一 筆申遣候儀然者其宿西横町一丁目西方空地之
所ニ地藏家形并汲井戸雨覆致度願御聞濟ニ候
間此段可被申渡候

弘化二巳年

四月廿四日

森善治郎

草津宿

庄屋中

二〇 覚
東横町往還伏樋
一 瓦樋

一 同 三間三尺
一 同 三間式尺
一 同 二間五尺

右三ヶ所寛政七年卯九月新願御免被成下候御徒目付
伊東官右衛門様之御取扱ニ御座候以上

弘化四年

未七月十三日

草津宿

(此度御伏替御願申上候ニ付旧記御尋ニ付右之
通門間様へ書付を以申上候)

二一 乍恐奉願口上之事

△此橋之上車乘へからず

右宿内ニ有之候字宮川石橋傍示杭朽し有之候処此度
洪水ニ而阿橋詰とも流失仕候ニ付新規御建替之義乍
恐奉願上候依之積り書左ニ奉入御高覧候間何卒御用
代御下ヶ被為成下候ハ、難有仕合ニ奉存候以上

一 楠四寸角長サ九尺式本

代銀 拾四文

右之通御座候以上

年寄

駒井麻次郎

嘉永七年

閨屋

須左美仲右工門

申八月二十六日

庄屋

山内孫右衛門

両御役所様

(右橋四寸角ニ而御仕立御文言まで御認メ
九月廿一日被下候事)

二三 乍恐奉願口上書

一 当宿字宮川往還通石橋下鋪石六月中洪水之砌崩候
所水勢強押流候哉石数不足仕候ニ付御修覆被成下
候様奉願上候則左ニ積り書入御高覧候乍恐御見分
之上右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合ニ奉
存候以上

年寄

辻 五兵衛

申年七月八日

閨屋

辻 重左衛門

庄屋

山内孫右衛門

高田治郎八

御奉行様

両御役所へ

積書

一 石数 三十 但し沓ツ三文ツ、

代 九十文

一 矢橋運賃 但し沓ツ式文ツ、

代 六十文

一 石工并手伝式十五人 但し沓人ニ付三文ツ、

代 七拾五文

ノ式百廿五文

右之通ニ御座候以上

酉四月廿一日

八十四文敷石大工手間として間屋ニ而山田様ハ貫申上候

二三 乍恐奉願口上書

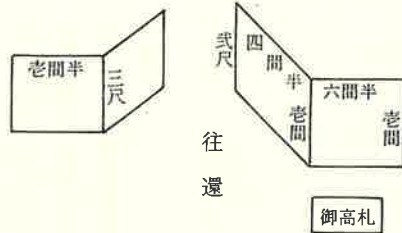
一 当宿中山道江見附杭柵竹殊之外朽損し難保相成候

ニ付御修覆之義奉願上候処御見分被為成下難有奉

存候然ル処当時檣杭并竹ハ格別値段高値ニ御座候

間新規石垣ニ被成下度段乍恐奉願上候処右石垣積

書奉差上候様被為仰付則左ニ奉申上候



往還

御高札

此石垣坪拾沓坪七分五厘

此代銀沓貫五拾七文五分

但し石沓ツニ付式文ハ三文迄

切□□

石類荒切

沓坪ニ付九十匁宛

右之通御座候以上

年寄

駒井麻次郎

同庄屋□□

田中平右衛門

庄屋 山内孫右エ門

高田治郎八

嘉永元年申

四月八日

但し往還方

御奉行様

右積銀高沓貫五拾七文五分

内

三百五拾貳文五分 三分者宿米を為御
冥加上納御用代被下置候
七百五文

右之通御願同年五月御聞濟普請出来候事

二四

嘉永六丑年二月六日御 目附林 貫一 様当宿へ
御越之節砂留古来間敷員数々御尋ニ付□差上候
写

川敷の登方

東海道口

一 長四間 卷本 一長貳間貳本 一長貳間 卷本

一 同三間半 貳本 一 同貳間半 卷本

一 同三間 卷本 一 同三間 五本

伝右工門表の地藏前迄

一 長貳間 卷本

一 同貳間半 六本 合三拾三本 長九拾三間半

一 同三間 拾三本

川敷の登り 中山道口

一 長三間半 卷本 一長貳間貳本 一長貳間 七本

一 同三間 卷本 一長貳間半 四本

一 同貳間半 貳本 一長三間 貳本

二五

(表紙)

東海道仲仙道打合草津村往還ニ
及ヒ道幅橋とも間敷書上

一 長三間 四本

一 同三間半 卷本

一 同貳間 四本

一 合六拾貳間半

合貳十八本 長六拾九間

一 東街道近江国栗太郡第三区草津村

東京方栗太郡大路井村界ヨリ

西京方同郡矢倉村界迄 往還道筋七百七拾四
間五尺五寸

一 中仙道口 但道幅貳間三尺

一 東京方栗太郡大路井村界ヨリ

西京方同郡矢倉村界迄 往還道筋四百八拾
卷間貳寸五分

但道幅貳間三尺

内

東街道口

字砂川

中仙道口

字砂川

幅拾六間半 但橋無御座候

幅拾七間五寸 但橋無御座候

字内融寺川幅老間 但し石橋
字三王川 幅五尺 但し石橋
字志津川 幅四間老尺七寸 但し石橋
字聖靈川 幅三尺三寸 但し石橋
右之通相違無御座候以上

明治五年

壬申七月廿三日

右草津村
年寄

深尾又七郎

同 深田善五郎

庄屋 喜多村九右衛門

同 駒井與左衛門

滋賀県

御廳

二六

(表紙)

明治五年
道案内立石之義ニ付
御願書
栗太郡
草津村
元山田村
申
十一月十日

乍恐以書付御願奉申上候

一 草津村元山田村江道筋取繕ニ付木川村地之内ニ

擬所有之右付替之儀御聞届被為成下御蔭ヲ以普請
出来仕旅人者不及申ニ村ニ至極之便利ニ相成難有
仕合奉存候依之諸人為案内草津駅宮橋之北ニ元山
田道立石仕度此段御願奉申上候何卒御憐愍を以
右願之趣御聞濟被為成下候得者難有仕合ニ可奉存
候以上

壬申

十一月十日

栗太郡元山田村

副戸長

杉江平右衛門

戸長

草津村 杉江三郎兵衛

副戸長

深尾又七郎

戸長

駒井與左衛門

滋賀縣令 松田道之殿

右御付紙

聽届候事
但書面元山田と唱候義者
不相成候条元浜と可記事

(表紙)

伯母川筋通船之義ニ付

御 届 書

栗太郡

草津村

南山田村

乍恐以書付御届奉申上候

栗太郡第三区

同郡第八区

草津村

南山田村

右伯母川筋通船事件示談方之義ニ付去ル十七日御召出之上御説諭之趣深恐縮仕候依而双方懇談仕各約左之通相整申候

第一条

此所新規砂留橋丸太杭打置尤南山田村の悉皆入用ハ差出可申已後破損共右同村の差出可申事

第二条

此所三ヶ所新規砂留橋丸太杭打置尤諸入用南山田村の悉皆差出可申已後破損共右同村の差出可申事但三ヶ所共檔丈丸太□打直之事

第三条

此宮後門樋在来之姿の卷尺引下可申破損所ハ取繕相用可申候自然取繕難出来節ハ新規ニ門樋出来可申右入用此度限南山田村の悉皆差出可申已後入用之義草津村四分懸リ南山田村六分懸リ條約之事

第四条

此十条門樋在来之姿の卷尺五寸川下ケ可申普請入用義ハ第三条同様之事

第五条

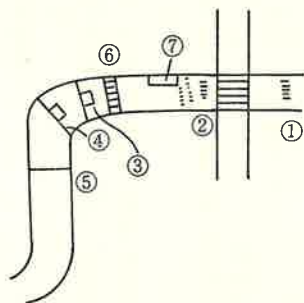
此掛越樋養水中従前之假□除通船中取除ケ置尤右入用南山田村の悉皆差出可申候事

第六条

右両堤往還通石橋下手石垣の川下者字三ツ池門樋迄両堤共竹柵松八尺杭四尺杭打込ミ□卷閘ニ五本打尤従前之柵杭木相用可申右取繕諸入用共ニ南山田村の悉皆差出可申已後破損取繕之儀右同村より差出可申事

第七条

此所船乗場新規石垣五間之間仕候尤入用南山田村の已後取繕悉皆差出可申事



①～⑦は
第一条ノ第
七条を示す。

一 養水中通船相休ミ可申事

但草津村用水中たり共満水之砌者草津村ノ案
内次第通船不 候尤通船中たり共用水之節ハ
草津村より案内次第通船相休ミ可申事

一 通船出来候より養水之妨并往還石橋堤筋ハ差障

ニ相成候節ハ南山田村ノ損候所江無相違 請可
致候其他不都合之義相候ハハ利害得失取調之上
通船相止メ式ケ所之門樋并懸越樋共從前之通相
直シ可申事

一 満水之節者早速右場所江近付水害無之様南山田
村より注意可致事

右之通堅條約仕候就而者双方示談相整申候間依之兩

村連印を以乍恐此段御届ケ奉申上候以上

明治六年

三月二十二日

栗太郡第三区

草津村

戸長

喜多村九郎右衛門

戸長

駒井与左衛門

栗太郡第八区

南山田村

村惣代

老番屋敷

木元通伝

同 三番屋敷

木戸孫右衛門

副戸長

岸本伝四郎

戸長

岸本与左衛門

滋賀県会松田道之殿

聞置候事

二八

(表紙)

御高札場建物間敷之義ニ付

御 届 書

栗太郡第三区
草津村

乍恐御届書

一 御高札場建物老ケ所

西柱^左

東柱^右

式間壹尺八寸
但し六尺三寸竿

北柱^左

南柱^右

三尺三寸

右之通ニ御座候以上

明治六年四月十三日

滋賀県令松田道之殿

栗太郡草津村
戸長

喜多村九郎右衛門

同

駒井与左衛門

副戸長

深尾又七郎

□ 聽 置 候 事 □

二九

御高札御返上之義ニ付

御 届 書

栗太郡
草津村

乍恐以書付御届書

一 御高札 三枚

右奉御返上候已上

明治六年四月三十日

滋賀県令松田道之殿

右御付紙

栗太郡第三区草津村

副戸長

深尾又七郎

受 取 候 事

三〇

明治六年

凍 證 書

第四月廿七日

三 町 目
二 町 目

差上申凜證之事

一 今般田中九藏屋舖地之内南端空地辻重兵衛借受車
小屋新規取建候付者其右小屋南之方出張御座候間
三町目ノ御願奉申上候処兩町御呼出之上深御利解
被成下何共奉恐入候則兩町爾談仕候処田中九藏石
垣際ノ三町目際目杭迄現今有地老丈老尺御座候内
道敷地及田中九藏持空地共半通リ五尺五寸宛迄相
定双□尔談相整申候ニ□右地所御見分之上□目御
致シ□□下条□□奉存候右ニ付自今已後差障之
筋更ニ無御座候依而兩町連印ヲ以済証差上候上者
聊相違無御座候以上

明治六年四月廿七日

三代目總代

奥村孫十郎

〃 崑多村又左衛門

〃 嶋田重右衛門

右組頭

木村儀兵衛

二町目

田中九藏

辻重兵衛

右町總代

寺元治郎三郎

右組頭

辻四郎兵衛

戸長

副戸長

御中

戸長 駒井与左衛門

崑多村九郎兵衛

副戸長 宇野長治郎

深尾又七郎

杭打藏間

井上善七

升屋

木村久七

(注、……は斜め書)